

### 現場の人々と協働し アフリカの成長を後押ししたい

JICAウガンダ事務所で保健分野の協力を担当する高野晋太郎さん。「予想外のことが起こるのが途上国。何事にも柔軟に対応すべき」。ウガンダの人々の思いを形にできるよう、国の成長を見据えた支援を続けている。

#### 「世

の中に豊かな人と貧しい人がいるなら、後者の力になりたい」。これが、私が国際協力業界を志した原点です。海外に興味を持ち始めたのは高校生の時。地方出身で外国人と接する機会はほとんどなかったのですが、近所の留学生と話をしているうちに「世界は広いんだなあ」と。国境の先に存在する、空間に、漠然とあこがれを抱いていました。まずは日本と世界のかかりについて学びたいと、大学では「国際協力論」のゼミを選びました。指導教員は新聞記者として国際協力の現場を歩き続けてきた方。取材での実体験を通じて、外務省やJICAだけでなく、NGOや民間企業などさまざまなアクターの活動を多角的な視点で学ぶことができました。中でもJICAに就職しようと思ったのは、「国づくり」というダイナミックな視点で途上国の開発に携わることができる点に魅力を感じたからです。

最初に配属されたのは、国内拠点の中部国際センターでした。中部地方は、ものづくりが盛んな地域。研修事業の担当だったので、日本人でありながらもあまり意識することがなかった。日本の技術力の素晴らしさを実感する日々でした。海外とかわかる仕事をやる上で、日本の現場で日本の強みを再確認することができたのは貴重な機会でした。

3年間の勤務を経て人間開発部に異動。「弱い立場の人の助けになりたい」という自分のキャリアの原点に立ち返りたいと、保健分野の担当を希望しました。とはいえ、まったく専門外の分野だったので、各国の保健省が出している指針や関連文献を読んでとにかく勉強しました。

アフリカとの出会いはこの時。ウガンダの「医療機材保守管理プロジェクト」の調査が、初めてのアフリカ出張でした。日本ではネガティブなイメージが先行しがちなアフリカですが、飛行機から降りると人間がほっとできる緑豊かな空間が広がっていました。一方で、街人も活気にあふれていて、未知なるポテンシャルを感じたのを覚えています。

そして2008年7月、ウガンダ事務所に赴任。人間開発部で携わっていた案件を引き継ぎ担当することになり、今度、現地の人々と日々顔を突き合わせながら仕事ができることがうれしかった。「現場で得られる情報は何にも代え難い」と、いつも出張時に感じていたからです。ウガンダは順調に経済成長を続けていますが、乳幼児や妊産婦の死亡率はまだまだ高いのが現実。JICAは医療施設機材の整備から保健サービスの改善まで、ハード・ソフト両面から協力を続けています。

そして今年からはJICAの協力準備調査(BOPPビジネス連携促進)を通じて、サラヤ株式会社との連携事業が始まりました(8ページに関連記事)。私にとってもJICAにとっても新たな挑戦です。これまで蓄積してきたJICAのノウハウと企業のビジネスセンスを合わせれば、課題解決の突破口が見出せるかもしれない。



JICAウガンダ事務所  
高野 晋太郎  
TAKANO Shintaro

大学卒業後、2003年JICAに就職。JICA中部国際センター、人間開発部を経て、08年7月から現職。



協力隊員が5Sの普及を進める病院を定期的に訪問し活動の進捗を確認。看護師からの信頼も厚い

るかもしれない。JICAの提供したリソースを企業の皆さんがどう料理してくれるのか楽しみでもあります。民間連携では、開発課題の解決と企業活動をどう結び付けていくかが重要。その方針にブレが生じないよう、サラヤの担当者とも慎重に議論を重ねています。

仕事をする上でいつも心掛けているのが、現地の保健省や病院関係者、日本人専門家、企業の方、青年海外協力隊員などが、現場で各自の個性や強みを最大限に発揮できるような環境づくり。そのためにはまず、何かあったら話せる、いや、何もなくても話せる。信頼関係が大切です。そして、一度つなぐた縁はそう簡単には消えない。それがJICAの貴重な財産にもなっています。

ウガンダでの勤務ももうすぐ4年。まさに成長の最中にあるこの国の未来に貢献できるよう、現場の方々と協働しながら私も努力と成長を続けていきたいと思っています。



アフリカ広域研修で各国の参加者と5S(整理・整頓・清掃・清潔・しつけ)の普及について議論する高野さん